



「仲良し姉妹です。」

加本 蓮花ちゃん・彩花ちゃん
H14. 4. 23生・H15. 10. 8生 (西の浜)



「我が家のアイドル 悠翔♥
生まれてくる赤ちゃんと仲良くね」

伊藤 悠翔くん (三番町)
H14. 11. 20生



「いつもケンカばかりだけど
仲良く大きくなってね」

原田 千琴ちゃん・れみちゃん
H12.2.12生・H11.1.31生 (白石島)



「男の子だと思ってたら
女の子でした」

小寺 きつぺいさん (4歳)
小寺 幸恵さん (今立)



「中村家の親分です!!」

中村 葉菜ちゃん (横島)
H14. 10. 31生

「宝物」はその人にとって、かけがえのない人(子ども)であったり、可愛いペットであったり、他人には思いもつかない「物」であったりすると思います。そんな宝物の写真を一言メッセージを添えて、まちづくり推進課まで送ってください。

展覧会のご案内

特別陳列「竹喬と俳句」

7月24日(土)～10月11日(祝)

竹喬の俳句を紹介。

9月12日(日)13:30～ギャラリートークを開催(聴講無料、入館料のみ必要)。



〒714-0087
笠岡市六番町1-17
Tel.63-3967
ホームページ
<http://www.city.kasaoka.okayama.jp/0013/0001.html>

「京都の明治のころを、思いおこしながら描いてみた。現在の姿とは、もうすっかり、変わってしまった場所が多いようである。」
『天皇の世紀』の挿画は、竹喬の記憶にある明治時代を描いてほしいとの依頼であった。竹喬が笠岡の親元を離れて絵を学ぶために京都に移ったのが明治36年。まだ14歳の少年であった。その当時の京都を思い起こせば、「高瀬川の仏光寺あたりの西側は、醤油倉のならんだ裏壁が続いていたが、夜になるとまっ暗で、わずかに道路わきにある瓦斯灯のぶい光りが、数条の柳の糸を浮きたたせていた」という。
高瀬川は江戸時代の初めに京都の豪商角倉素庵によって開削され、長い間二条と伏見を結ぶ水運に大きな役割を占めていた。大阪からの荷物が、力自慢の曳き子たちの力によって川を遡って運ばれてゆく。大正中頃にはこの水運もその役割を終えているから、まさに明治の頃、京都に出てきた遠い昔を思い出しながらかかれたものであろう。



「高瀬川 I」

小野竹喬 作

朝日新聞「天皇の世紀」挿画
昭和42年8月29日掲載
15.6×17.3cm

竹喬美術館の光彩 21

今月の表紙

夏はプールが一番!と言わんばかりの笑顔を見せて泳ぐ子どもたち。7月18日から31日まで行われた親子水泳教室の一コマです。
この教室は、親子のふれあいを大切にしながら水に慣れ親しもうと、毎年開講しているもので、今年は15組38人の子どもとその保護者が参加しました。講師の先生の指導のもと、手をつなぎながら仲良く一緒に泳ぐ親子の姿は、ほほえましいものでした。

係から

今回のアテネオリンピックでの日本選手団の活躍は、目を見張るものがありました。そのおかげで、ついつい夜ふかしをしてしまい、寝不足の日々が続いた人も多かったのではないのでしょうか。

実は私もその一人で、選手ががんばっている姿に感動して、ついつい明け方まで見入ってしまい寝不足になっていました。

しかし、選手の活躍を見て元気をもらったためか、朝はすがすがしい気分と今日もがんばろうという気持ちで湧いてきて、なぜかいつもより充実していたような気がします。

選手の皆さん、感動と元気をいただきありがとうございます。そして、お疲れ様でした。(松)



発行日/平成16年9月1日
発行/笠岡市役所
編集/まちづくり推進課
〒714-8601 笠岡市中央町1-1
Tel.69-2110

印刷所/株式会社 正文社印刷所 ☎66-1687

笠岡市ホームページ: <http://www.city.kasaoka.okayama.jp>
メールアドレス: kouhou@city.kasaoka.okayama.jp



※この広報は再生紙を使用し地球環境にやさしい植物性大豆油インキで印刷しています。



古紙配合率100%の再生紙を使用しています